四

その夜、坂崎磐音は豊後関前藩の下屋敷を訪ねた。

中居半蔵の依頼でだ。

待っている人物がだれか、予測はついていた。そこで深川を出るとき、宮戸川に立ち寄り、鉄五郎親方に腕を振るってもらって焼きたての鰻の蒲焼を重箱に詰めて提げていた。

果たして下屋敷には、藩主の実高と奥方のお代の方が待っていた。

「磐音、よう来たな」

「近々参勤下番で国表に戻らねばならぬ。そこでそのあたともしばしの別れ、水入らずで酒など酌み交わそうと思うて呼んだ」

と言った。

「勿体なきお言葉にございます」

お代の方がにこにこと笑みを浮かべて、

「坂崎、市井に暮らしておるそうじゃな。奉公と違うて気が楽であるか」

と尋ねた。

お代の方は小城鍋島の娘で、江戸育ちの女性であった。

「気が楽と申せば気が楽にございますが、生計を立てるのがなかなか大変にございます

「何の仕事をしておるな」

「はい、鰻割きにございます」

「なにっ、鰻割きとな」

実高がびっくりした顔で訊いた。

「はい。近頃、江戸にて鰻を食することが流行りまして、背から割いた鰻を蒸し焼きにして、香しくも甘辛いたれをつけまして炭火で焼きまする。香しいところを飯と一緒に食するのでございます」

「奥も余も未だ食したことがないな」

「今宵、持参いたしました。熱々のところを食するのが江戸者の食べ方にございます。ちと冷めましたので、ただ今、炙り直せております」

「これが鰻の蒲焼か」

「それがしが朝の間に割いた鰻にございます」

「それがしが朝の間に割いた鰻にございます」

「どの、なんとも香しい匂いでございますな」

実高とお代の方が皿に分けられた蒲焼を恐る恐る食して、

「これは美味かな」

「おいしゅうございますな」

とにっこり笑った。

そこへ女中たちが膳と酒を運んできて、中居半蔵も姿を見せた。

「ここはよい。女どもは下がっておれ」

実高は、お代の方と半蔵と磐音の三人だけを残して離れから遠ざけた。

「これで水入らずじゃ」

と言われた実高は、

「半蔵、そちは磐音が割く鰻を食したことがあるか」

「時折り、深川へ参りますれば」

「そなたはかような美味のあることをだまっておったか」

「いえ、鰻は国許では下賤な食べ物ゆえ、どののお口などには合いますまいかと」

「嘘を申せ」

実高は二人前の鰻を食べ、

「いやはや巷には美味しきものがあるものよ」

と嘆息した。

磐音はお代の方に酌をされて恐縮しながら口に含んだ。

「磐音、過日は利高が世話をかけたな」

憂い顔に変えた実高が従兄弟の不実な行動を謝った。

磐音は半蔵を見た。

「殿には真実をお知らせ申し上げた」

「江戸に出て参ったばかりゆえ、小林奈緒の気持ちを斟酌する余裕もないであろう。今、しばらく時を貸してはくれぬか」

「恐れ多きお言葉にございます」

それと磐音……といったん言葉を切った実高が、

「そなたのお陰で江戸を離れることができる。このとおりじゃ」

と頭を下げた。

磐音はがっぱとその場に平伏した。

「殿、殿と奥方様にはご心痛をおかけ申して、おいたわしゅうございます。今津屋の老分どのも涙を禁じ得なかったと話してくれました」

「磐音、半蔵、頭を上げよ。それでは酒も飲めぬ」

磐音はようやく頭を上げた。するとかたわらの半蔵も姿を正した。

「今日はそなたらと暇乞いの酒を酌み交わすつもりじゃ。この話はこれまでにいたそう。江戸の暮らしを教えて暮れぬか」

実高が磊落に言った。

「殿、その前に一つだけお尋ね申してようございますか」

「遠慮はいらぬ、申せ」

「殿と奥方様が用意なされたお見回りの調度の他に担保があったと、今津屋の老分どのが申されました。恐れながら江戸藩邸のお蔵にもないことは分かっております。ほかになんぞございましたか」

磐音の問いに半蔵も同意するように頷いた。

「おおっ、あの一件か」

と応じた実高がしばし磐音の顔に視線を据えると、

「失ったものは大きいのう」

と嘆息した。

「失ったものと仰せられますと」

半蔵が言葉を挟む。

「半蔵、今津屋はかように言いおったわ。二千五百両の担保、坂崎磐音様のお体で申し受けます。もし豊後関前藩がご返借なきとき、坂崎様の御身、今津屋にて貰い受けます、とな」

「な、なんと」

仰天の声を上げたのは中居半蔵だ。

「番頭はこうも申した。坂崎磐音という人物、豊後関前という池におくよりは、天に放って自在に活躍させたほうが藩のためにもようございましょう。龍が天に昇るようにとな。このこと、主の今津屋吉右衛門の考えじゃそうな」

「龍天に昇るとは中国の言い伝えで、冬の間、眠りに就いていた万物が動き出し、よみがえる春の盛んな気分を讃えたもので、大いなる飛躍を意味した。

吉右衛門は坂崎磐音の身を龍天に譬えたのである。

「半蔵、金がないのは哀しいのう。有為の家臣を担保にする大名がどこにおる」

磐音は再び首を垂れて上げられなかった。

重い沈黙を破ってお代の方の声がした。

「殿、ものは考えようにございます。今や御三家ですら巷の両替商や札差に首根っこを抑えられている御世にございます。そのようなときに坂崎磐音の身に多額の値をつける両替商がおる。それは取りも直さず、関前藩の人材を評価してくれたこと、喜ばしき話にございませぬか」

「奥、そうは申すが、江戸に出て参るやなにかにと理由をつけて吉原に上がろうとする手合いがおる。そのことを考えるとき、磐音が家中におらぬのはなんとも寂しいぞ」

「殿、先の騒ぎに多くの人材を失いました。今、改めて財政再建と人材育成に尽くす時、磐音には藩の外にてひと頑張りしてもらいましょうぞ」

半蔵が言い、実高も、

「国表に戻った暁には正睦と相談し、藩の物産を一日も早く江戸に積み出す算段をいたす」

「殿、そのことにつき、半蔵、お願いの儀がございます。江戸での受け入れを確かなものにするため、殿のお供をご辞退申し上げとうございます。お許しいただけますか」

半蔵が参勤下番の随行遠慮を申し出た。

「江戸での受け入れ、そなたと磐音がおらねば物事は進まぬわ。そのために今宵二人を呼んだのじゃ」

「ご賢察恐れいります」

半蔵が頭を下げ、

「もはや堅苦しい話はやめじゃ、磐音、長屋の暮らしを奥に話してくれ」

と実高が明るい声で言った。

この夜、豊後関前藩下屋敷にはいつまでも明かりが点されて、お代の方の笑い声が響いていた。

その日、江戸は雲一つない青空が広がった。

磐音は六間湯で体をきれいに磨き上げた後、昼過ぎから待合せて、鰻捕りの幸吉と幼馴染のおそめを誘い合わせ、両国橋を渡った。

二人の親には、

「ちと遅くなるやも知れぬが、それがしが送り届けるでご心配なきよう」

と挨拶してあった。

「浪人さん、やっぱ約定をよ、覚えていてくれたんだ」

幸吉はいつにも増して嬉しそうだ。

浅草奥山とは、江戸時代の一大娯楽場だ。

金龍山浅草寺の本堂裏手にあたる寺域は、俗に奥山と称され、見世物小屋、大道芸、茶屋、露天商、物売りが集まって客を奪い合っていた。いわば江戸時代の娯楽の本場であった。

まずは本堂にお参りして賽銭を上げた。

「おそめちゃん、おいらさ、門前町の鰻屋に鰻を売りに来るんだけどよ、一度だって奥山に踏み入れたことがねえんだ。おっ母は、子供がゆくとこじゃねえと言うけど、飴なんぞくわえてよ、おいらより小さいのが出てくるんだぜ」

磐音は一朱と小銭を混ぜて入れた紙の財布を幸吉とおそめに１つずつ差し出した。

「いつも世話になるでな。小遣いだ」

「浪人さん、心配するねえ。おっ母さんからもらってきたからよ」

「それは土産代にとっておくとよい。これはそなたらへの褒美だ」

「いいのかい、無理してよ」

「懐が温かいのじゃ。遠慮するほどの額ではない」

「それじゃあ」

と幸吉は受け取ったが、おそめはまだ遠慮していた。

「おそめちゃん、いつも言うだろ。おれたちはさ、家族同様の仲だ。浪人さんがいいというときは、素直に受け取るもんだぜ」

幸吉が受け取り、おそめに押し付けると、

「なあにそのうち、おいらが倍にして借りを返しておくからよ」

と胸を張ってみせた。

おそめがようやく財布を懐に仕舞った。

三人は本堂の右手に回った。するといきなり、上方から下ってきたという篭脱けの見世物小屋の呼び込みが声を張り上げた。

「長屋の若様とお姫様を連れたお侍はん、小屋を覗いていかれしまへんか。驚き桃の木山椒の木、籠の仲の生身の人間が衆人環視の目の前で忽然と姿を消すんやで。種も仕掛けもおまへん。ほんまにこれぞ神隠し、江戸の見世物の比やおまへん」

幸吉は立ち止まりかけたが、おそめが握った手をぐいっと引っ張った。

「なんや、その年で、嬢はんの尻の下に敷かれとんのかいな」

「うるせえや。おいら、おそめちゃんの尻なんぞに敷かれてねえや」

「そうそう、その元気やで。男は度胸、女は愛嬌や。つんけんしたら、おそめちゃん、嫌われまっせ」

それが皮切りの大道芸の独楽回し、豆や徳利を虚空に投げ上げては巧みに操る豆蔵、高く積んだ箱の上で刃渡り四尺になんなんとする刀を居合い抜きしてみせる芸などを見物して回り、団子屋で団子を食べてひと休みした。

その後、幸吉とおそめは長屋で待つ兄弟姉妹に土産を買い、幸吉はおっ母さんにと七味唐辛子と雷おこしを買い、おそめは紅梅焼きと歯の悪い父親にと楊枝を求めた。

「楽しいな。今度はさ、おいらが治郎吉たちをつれてくらあ」

と兄弟姉妹のことに思いを馳せたのは、浅草寺の山門の前に出てきたときだ。もはや、暮れ六つを過ぎていた。

三人は御蔵前通りを抜けて浅草橋を渡り、両国西広小路に出た。

「幸吉どの、おそめちゃん、ちと今津屋に立ち寄っていかねばならない。そのあとな、橋をわたってなんぞ美味しいものを食べようか」

磐音は二人の子供を江戸の両替商の総行事の今津屋に誘った。

店はそろそろ暖簾を下ろす時分で、すでに忙しさの盛りは過ぎ、帳場では支配の中から老分の由蔵が睨みを利かせて見ている。

店内には大金を扱う緊張の空気がぴいーんと張り詰めていた。

幸吉とおそめは大店の店先に足を竦ませった。

「おや、おめずらしい、坂崎がお子連れとは」

由蔵が笑いかけた。

「今日は世話になっておる二人を連れて奥山にいって参りました。ついでともうしては申し訳ないが、過日、福山実高様にお会いしましたので、その報告とおれの挨拶に伺いました」

「それはご丁寧なことでございますな」

磐音の声が奥に聞こえたか、おこんが店先に姿を見せて、

「あら、幸吉さんにおそめちゃん、ようおいでなさいました」

と挨拶した。

おこんも深川六間堀の生まれだ、二人のことはよく知っている。

「おこんさんと同じ深川っ子かね。ならば、奥に行って、おこんさんに甘いものでも馳走になりなされ」

大所帯の今津屋を仕切る由蔵の声に、おこんが二人を奥へと連れて行った。

磐音は、近々江戸を離れる実高からの重ねての助力の言葉を由蔵に伝えた。

由蔵は胸を叩いて小さく頷いた。

そこへ支配人の一人が帳簿を持って、由蔵の指示を受けに来た。

磐音は、それを機に奥へと向かった。奥といっても広い板の間を待つ台所だ。

するとそこでは、おこんの世話で幸吉とおそめが膳を前に神妙に正座していた。

「夕餉はまだなんですって」

「帰りになんぞ食べて参ろうかと考えて追ったところです」

「今日は、魚河岸から桜鯛と蛤をたくさん貰ったの。旦那様のお許しで皆の食膳にも桜鯛が付くのよ。ここで食べて行きなさい」

由蔵が今津屋の店を仕切っているのなら、おこんは奥と台所をがっちりと掌握していた。

「桜鯛とはまた贅沢な」

「蛤はお吸い物よ」

そういながらもおこんは、女たちを指図して三つの膳を用意させた。中ぶりの鯛の塩焼きがさらにでーんと一匹丸ごと鎮座していた。

「これは美味しそうな」

磐音には酒まで付けられた。

おこんの気さくな応対に幸吉もおそめも、

「おいら、こんあご馳走食ったことがねえぜ。今晩よ、おいらの腹がびっくりして目を回すかもしれねえな」

「おこん様、ご馳走になります」

と口々に言いながら箸を取った。

「うちのお父っつぁんがえらいことをしでかしたんですって」

「ごぞんじか」

「長屋を代表して、おたねさんとおいちさんが掛け合いにやってきたわよ」

「金兵衛どのにも目違いはあろうが、お兼さんは金兵衛長屋が気に入った様子。今さら追い出すなどというのは無理と思えるがな」

「おたねさんたちは私に口を出せというけど、こればっかりは私なんぞしゃしゃり出る幕ではなさそうね」

磐音話を訊いたおこんが笑った。

「まあ、時が経てば、女衆も打ち解けよう」

「どてらの金兵衛さんのためにそうなることを願うわ」

とおこんが父親のことをそう呼んで笑った。

奉公人たちが店の片付けを終えて台所に顔を揃えた。

住み込みの者たち三十数人が膳を囲んで飯を食べる光景は、初めて見る幸吉とおそめの度肝を抜いたようだ。

幸吉などは、箸を持ったままぽかんとしばらく見詰めていた。

おこんから甘いものの土産まで貰い、三人が今津屋の店を出たのは、五つ半に近い刻限だった。

「遅くなったな、お父っつぁん、おっ母さんが心配しておらぬとよいが」

「なあに遅くなると言ってきてるんだ。木戸口が開いているうちは心配ねえさ」

三人は川風の吹き抜ける両国橋にかかった。

さすがに荷船の往来は途絶えていた。

だが、猪牙舟や屋根船が行き来して、櫓の音が風に乗って伝わってきた。そしてその風には春の温もりが漂っていた。

磐音は長さ九十六間の橋のほぼ真ん中まできたとき、異変に気付いた。

先日から時折り監視の目を感じていた。が、この数日、それが消えていた。そのせいでつい油断した。

「幸吉どの、欄干に寄っておそめちゃんの身を守ってくれ」

磐音の言葉に幸吉がびっくりして前後を見た。

行く手に３つ、背後に二つの影があった。

「浪人さん、強盗かい」

「われらを襲ったところで小銭しか持たぬ。どうやら違うようだな」

前後を塞ぐ影が間合いを詰めてきた。

行く手の中央の影の衣装を見たとき、磐音は、佐々木玲圓道場に道場破りに訪れた赤鞘組の頭領、曽我部下総俊道とその一行かと納得した。

曽我部らは磐音たちを五間の間合いに挟み撃ちしていた。

「月夜の散策にございますか」

磐音ののんびりした言葉に曽我部が羽織を脱いだ。

「亀山内記の汚名を雪がねば、赤鞘組の名が廃る」

「直参旗本が餓狼のような真似をすることこそ恥にございましょう」

「言うな」

磐音はもはや戦いしか選ぶ道がないことを悟った。

「そこもとは神道無念流じゃそうな。それがしと一対一の勝負でようございますか。それとも衆を頼んで五人にて戦われますか」

磐音はできるだけけが人が出ることを避けようと考えた。

「むろん、それがし一人にて十分」

と言い放った曽我部は、

「聞いたか。この勝負、それがしとこやつの戦いじゃ、手出しは無用」

と手下たちに告げた。

「お相手仕る」

幸吉が欄干におそめの体を押し付けるように庇って立った。

「おそめちゃん、目を瞑っておれ」

磐音はそう言うと備前包平二尺七寸を抜き、地擦りに付けた。

曽我部俊道は、正眼に剣を取った。

神道無念流の堂々たる構えだ。

俊道が間合いをすうっと一間まで詰めて動きを止めた。

深川のほうから提灯の明かりが近付き、橋の真ん中の戦いに気付いて止まった。

提灯持ち、若党を従えた武家だった。

月が群雲に隠れ、再び半月を見せた。

淡い明かりが両国橋に落ちた。

曽我部の正眼が自らの眉間近くに引き付けられて立てられると、すっくと伸びた剣がわずかに上げられた。

疾風が巻き起こった。

怒涛の踏み込みで、剣が不動の磐音飲み剣に落ちてきた。

磐音の腰が沈み、地擦りの包平が円弧を描いて伸びると、曽我部の剣に

ふわり

と絡んで、勢いを削ぎ取った。

（真綿で包まれる）

と表現される居眠り剣法の真骨頂だ。

曽我部は磐音の包平を弾くと、二の手を肩口へと送り込んでいた。

それも磐音はやんわりと受けた。

さらに三の手を胴に繋げた曽我部の真の一手が、飛び下がりざまに磐音の首筋を刎ねきろうとした。

曽我部俊道は亀山内記と対決した磐音の剣質を読み切って、一、二、三の手と捨て技を作り、四の手に掛ける連続攻撃を組み立てていた。

それがこの一手だった。

だが、磐音は曽我部の飛び下がりに、

すいっ

と従うと、胴に来た剣を弾いた包平を曽我部の胴へと伸びやかに抜いていた。

曽我部の予測を超えた磐音の自在の動きだった。

一瞬の遅速で磐音の抜き胴が決まった。

うっ

曽我部下総守俊道が棒立ちに竦み、その直後、ゆるやかに橋板へと崩れ落ちていった。

「お見事！」

という声が両国に響いた。

見物の武家からだ。

「戦いの仔細は知らぬ。だが、勝負の行方、しかと御小姓組、赤井主水正、見届けたり。後日、なんぞあれば、それがしが立会人として何処へなりとも出向こうぞ」

「六間堀金兵衛長屋住人長崎磐音、しかと承りましてございます」

赤井が磐音に会釈して、両国西広小路へと渡っていった。

呆然としていた赤鞘組の残党が曽我部のかたわらに走り寄った。

「幸吉どの、おそめちゃん、待たせたな。参ろうか」

磐音は二人を前に行かせ、両国橋を深川へと向かった。

「火の用心、さっしゃりましょう！」

東広小路の一角で夜番の声と拍子木が鳴り、橋を渡り切った幸吉が、

ふうっ

と溜めていた息を吐いた。

春の月が再び群雲に隠れ、三人を隠した。